

# HIMALAYA

# ヒマラヤ

## No. 174



**1986 MAY**

**日本ヒマラヤ協会**



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

# 昭和61年度通常会員総会のお知らせ //

日本ヒマラヤ協会昭和61年度通常会員総会を下記により開催いたします。

ご承知のように、総会は本会の最高意志決定機関でありますので、会員の皆様には万障繰り合せのうえ出席くださるようお願いいたします。

なお、やむを得ず欠席される場合は、定款の定めるところにより、委任状を必ず提出されるようお願いいたします。(委員状は、別途送付いたしました料金受取人払はがきをご利用ください。

5月15日までに必着するようお願いいたします。)

## 3. 議 事

- (1) 議案第1号 昭和60年度事業報告について
- (2) 議案第2号 昭和60年度収支決算について
- (3) 議案第3号 昭和61年度事業計画について
- (4) 議案第4号 昭和61年度収支予算について
- (5) 議案第5号 役員および評議員の一部補充について
- (6) 議案第6号 会員の除名について

## 4. その他

## 記

1. 日時 昭和61年5月24日(土)午後1時00分
2. 場所 大正セントラルホテル会議室  
(東京都新宿区高田馬場1-27-7)

## 表紙写真

濃霧の中の頂上に別れを告げ、30分程下ると、なんと濃霧が切れだし、薄日が差してきた。濃霧の間からトリポールやモムヒル・サールが顔を出し、ついには雲海上にクンヤン・チッシュ(7,852m)も姿を現わした。

(東京志岳会マラングッティ・サール登山隊)

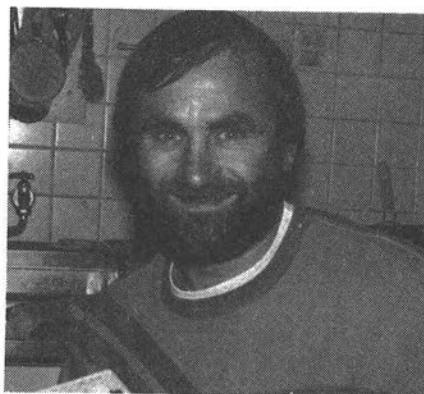
# ヒマラヤ No.174

1. ヒマラヤ放談 ————— J. トロワレ
7. ヒマラヤ・ニュース <地域ニュース・インフォメーション>
11. 中国登山研究会報告
22. 1986年パキスタン登山隊一覧
24. 寸感・事務局日誌

# ヒマラヤ放談

ジャン・トロワレ (Jean Troillet 38歳) 氏はスイスの登山ガイドである。昨夏スイスK 2隊にドクターとして参加し自らも登頂。冬にはダウラギリ I 峰東壁をアルパインスタイルで登った。この秋にチョモランマ北壁の単独登攀を狙うトロワレ氏は、北京で中国登山協会と議定を交した後、初春の日本を訪れた。

今月のヒマラヤ放談は、昨夏一緒になったH A J K 2隊のメンバーを尋ねて来局したトロワレ氏に、ヒマラヤの冬期登攀のことなど伺ってみた。



J・トロワレ

(Jean Troillet)

## ダウラギリ I 峰東壁冬期登攀

— ダウラギリの登攀について聞かせて下さい。J.T. すばらしいものでした。天候に恵まれましたし、壁の状態も非常に良かったんです。ルートは、1980年の英国・ポーランド合同隊とほぼ同じです。最初はもっとずっと左の、南東稜上部へ抜けるラインを予定していたんですが、悪天になったときに逃げられないと考えて、北東稜寄りのルートに変更したのです。メンバーは、私とエラルド・ローレタン、それにピエール・アラン・シュタイナーの3人です。最初はピエール・モランを加えた4人だったんですが、彼は調子が悪かったので登りませんでした。

我々は、ラルジュンから東ダウラギリ氷河にはいり、氷河わきの4,100mにベースキャンプを設けました。11月17日です。氷河の源頭、東壁の基部は広いプラトー状になっていまして……、標高は5,700mです。我々はまずプラトーの手前まで登ってイグルーを造りました。しかし、3人とも調子が悪く、高所順応が不十分だと考えて、一旦ベースキャンプへ戻りました。そして再びイグルーまで登り、今度はプラトーの途中まで行って東壁を偵察しました。このプラトーは、幅が約1.5 km

もあり、クラストした表面が割れて歩きにくい状態でした。このときはまた、北東稜を6,000mまで登って、下降路の偵察もしました。それから、ベースキャンプへ下ってゆっくりと休養しました。

アタックのためにベースキャンプを出発したのは、12月5日から6日にかけての真夜中でした。6日は、早朝5時30分に5,700mのイグルーに着き、昼の間はずっと寝ていました。夕方になって起き出し、たっぷり食べて飲みました。チーズ・フォンデュが美味しかったです。それから、またまた夜中になってからイグルーを出発。プラトーをトラバースして、東壁に取り付きました。最初の10mくらいは岩登りで、やや難しかったのですが、ロープは使いませんでした。それから、傾斜50度くらいの氷雪壁がずっと続きました。ほとんど堅雪で、登り易かったんですが、上部で堅い氷となり、傾斜も増して少々緊張しました。7,700mで北東稜上部に出て、風を避けてビヴァークしました。イグルーを出てから16時間たっていました。高度差2,000mを休むことなく登り続けたのです。

翌12月8日は、朝9時にビヴァーク地を出て、午後1時20分に頂上に立ちました。風がそれほど強くないのは幸いでした。北東稜を下降して、イグルーに着いたのは真夜中でした。

— 装備は？

J.T. ロープは8ミリ径40メートルのもの1本。これは一度も使いませんでした。それと、各自アイス・スクリュウ2本とカラビナ2枚、アイス・アックス2本にクランポンです。テントはなし。水をつくるために小さなストーブを1台持ちました。シュラフは、私だけ重さ2ポンドの軽シュラフを持ち、あとの2人はゴア・テックスの袋だけでした。それから、高所用のミトンをそれぞれワンペアずつ持ちました。ザックの重さは各自5キロくらいでしょう。靴はプラスチック・ブーツで、インナーは高所用のものを履き、オーバー・ゲーターを着けました。手袋は、登攀中は5本指のもので、ビヴァーク中はさらに高所用ミトンを重ねました。

— 食料は？

J.T. 棒状のオボマルティンを1人1日2本。3日分として1人6本をポケットに突っ込んでいただけです。それと、ビタミンCと各種ミネラルを配合した錠剤。1リットルくらいの水に1錠を溶かして、1人1日に1錠分を飲みました。水は雪や氷を融かしてつくったんですが、気温が低くてお湯にならず、水のまま飲んでいました。

— 7,700 mでテントなしのビヴァークというのは、どのくらい寒いんですか？

J.T. マイナス50度にはなっていたでしょう。16時間かけて東壁を登り切り、北東稜に出たところで夕方になって、氷を削って小さなテラスをつく

りました。ザックに座って3人が身を寄せ合って、朝まで耐えていました。14時間身体を丸めてじっとしていたのです。もちろん一睡もできませんでした。

— 凍傷には罹らなかったんですか？

J.T. いえ、私は血管拡張剤を飲んでいましたので……。ドイツ・バイエル社のアダラト・レタールという、2年前に開発された新しい薬です。実は、まだ高所で使用された例は報告されていないのですが、私自身は昨年のK2でも使っています。ダウラギリでは、エラルドも使いました。ピエールだけが使用せず、凍傷に罹りました。幸い軽くてすみましたが。

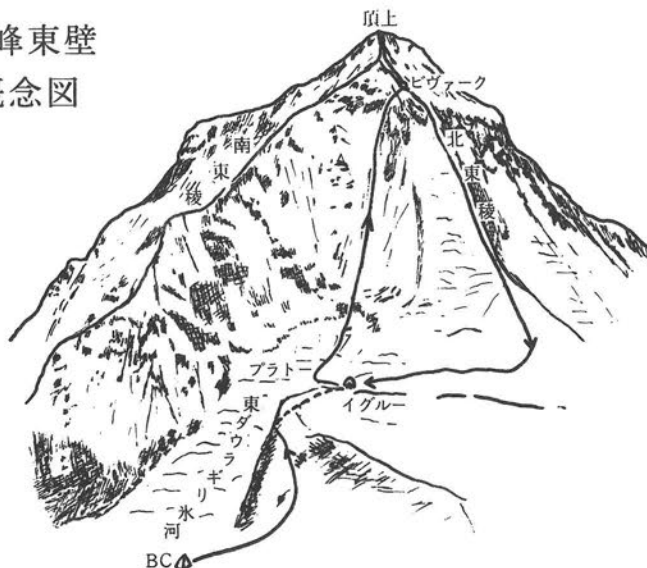
— 風はあまり強くなかったんですね。

J.T. 冬のダウラギリでは、だいたい南西の風が吹いていましたから、東壁を登って北東稜を下降するというのは比較的有利だったと思います。冬の8,000メートルで本格的に吹かれたら、とても行動できないと思います。特に西面と北面ではさまざま強い風が吹きます。ルートは南面か東面にとるのが有利でしょう。もしダウラギリの一番易しいルートが西面か北面にあったなら、我々は、そちらへは降りずに、迷わず東壁を下降していたでしょう。

— 冬の8千メートル峰登山についてご意見をお願いします。

J.T. 8千メートル峰に限らず、ヒマラヤでの冬期登山はこれからも増えるでしょう。ただ、8千

## ダウラギリ I 峰東壁 登攀ルート概念図



メートル峰の場合は特に風が強いことが大きな問題となるわけですから、上部でも行動が可能な条件というのはかなり制限されます。登頂時期としては12月中旬頃。我々は12月8日に頂上に立ちましたし、山田(昇)さんたちのマナスルは14日ですか、まあそのあたりが比較的チャンスが多いんじゃないかと思います。でも、昨冬についてはそういうことが言えましたが、毎年そうなるとは限りませんし、例えばポーランド隊は1月や2月にも登っていますから、まだ現在の段階では、はっきり何日頃が良いとは言えないでしょう。

登り方については、登頂の可能性を高くするためにはアルパイン・スタイルで登るべきだと思います。強風がおさまる期間はそんなに長く続きませんから、その短い時間のうちに登って、頂上に立ち、下降しなければならぬわけです。いくつもキャンプを出して荷上げをして、というやり方では可能性は少ないでしょう。それから、ルートを選ぶこと。難しい岩登りが続くようなルートは避けて、冬にこそ状態の良い、氷雪壁のルートを選ぶべきでしょう。そういう意味では、ダウラギリ東壁は冬期登攀むけのルートだったと思います。落石も少なく、コンディションは最高でした。

### チョモランマ北壁単独登攀

— この秋には単独でチョモランマ北壁へ行かれるそうですね。

J.T. はい、北壁をダイレクトに登るつもりです。日本ルートの左側の、1984年秋にオーストラリア隊が登ったところを考えています。ダウラギリの経験を生かして、テントなし、シュラフなし、食料なしのアルパイン・スタイルで、2日でやるつもりです。6,000 mくらいにキャンプを設けて、そこを夜中に出発して、その日は8,000 mくらいでビヴァーク、翌日頂上を往復してキャンプまで戻ってくる、という計画です。私は、1983年秋にもチョモランマ北壁へ行きましたが、そのときは7,000 mまでしか登れなかったのですが、ルートはよくわかっているつもりです。

— 単独というのは、かなり精神的プレッシャーが大きいんじゃないですか？

J.T. 私の場合、単独ということで特にプレッシ

ャーを感じることはありません。アルプスでは何度かソロ・クライムをやっています。ヒマラヤで単独の経験はありませんが、例えばダウラギリ東壁は、ロープを使わずに登りましたので、それぞれ単独で登ったようなものだと考えています。単独でつらいのは、ビヴァーク中に誰とも話しができないことくらいですかね。仲間がいるときは、いつも私が皆を笑わせて寒さを忘れさせるんですが(笑)……。

— 費用はかなりかかるんでしょう？

J.T. はい、まだ細かい計算はしてないんですが、とても自分ではまかないきれないのでスポンサーをつけるつもりです。それと、ひょっとしたら他に何人かが私の登山許可でチョモランマ北壁にはいることになるかもしれません。ロイヤリティや荷物輸送などの諸経費を人数割りにすれば私の負担が軽くなるからです。もちろん、その場合、ベースキャンプまでは一緒ですが登るのは別々のルートです。私はあくまでも単独で登ります。

私はまた、出版社とも契約して、登攀記を書くことにもなっています。ライターを一人ベースキャンプまで同行して、私の登山中、ベースに降りてくるたびに行動記録を口述で報告して、その場でタイプを打たせるのです。ベースにいる間に原稿の90パーセントはできあがる、というわけです。英語版とフランス語版を出す予定です。

— 隊荷はネパールから陸送されるそうですね。

J.T. はい、ダウラギリで使用した装備がカトマンズに置いてありますし、ベースキャンプの食糧などもカトマンズで調達した方が安上がりだからです。CMA(中国登山協会)の了解はとってあります。

### 仕事と遠征

— ヒマラヤへ行かれるようになったのは最近なんですね。

J.T. ガイド見習い時代とガイドになってしばらくはアルプスだけでした。1975年から10年間、夏はスイスで登山ガイド、冬はカナダでスキー・ガイドという生活でした。現在では両方の国籍を持っています。1976年からその他の地域に遠征するようになりました。最初はアラスカのマッキンレ

一でした。それから、U.S.Aのヨセミテ、アリゾナ、ユタ、コロラド、パフィン島、カナダ・ユーコンのロータス・フラワー・タワー、ペルー・アンデス、ケニヤ山など、毎年どこかへ出かけていました。最初の頃はアルプスとカナダの仕事の合い間に行っていたのですが、いつのまにか遠征の合い間に仕事をするようになっていました。(笑)

1982年の秋にマカルーへ遠征して、それからは毎年ヒマラヤへ行っています。マカルーのときは、最初は西稜を狙ったんですが、途中で北西稜に転進して、結局8,200mまでしか登れませんでした。アルパイン・スタイルです。83年秋はチョモランマ北壁で、これも失敗。84年にはアンナプルナI峰西壁の新ルートへ行きました。ダウラギリと一緒に登ったピエール・アランと2人きりで、アルパイン・スタイルでした。残念ながら成功しませんでした。それまでで最も印象的なクライミングでした。そのときの記録をピエールが日本の雑誌(クライミング・ジャーナル16号)に投稿したので、ご存知の方もいらっしゃるでしょう。すばらしい壁でした。アイガー北壁と同じくらいの難しさで、3,000メートルくらいあります。それから、昨年は、夏のK2(無酸素登頂)、秋のアンナプルナI峰西壁再戦(失敗)、冬のダウラギリ東壁です。

— ほとんど仕事をする暇がないじゃないですか。

J.T. 昨年あたりは、春にヘリ・スキー・ガイドを集中的にやっただけですね。ヘリコプターで山の頂上まであがってスキーで滑ってくるんです。お客は一度に1人か2人ですが、ヘリをチャーターするくらいの金持ちですから、いい収入になります。もう15年もガイドをやっていますから顧客も多く、それに私の家はフランスとイタリアの国境近くのオルジュールというところであって、生まれてからずっとそこに住んでいますから、スイスに帰れば仕事に困ることはありません。割のいい仕事を選んで、短い期間にまとめてやります。

私は、もともと必要以上のお金が欲しいとは思いませんし、欲しい物があれば買い、やりたいことがあればどンドンやります。

遠征費用は、ヨーロッパで調達する装備や食料

はほとんどメーカーから提供を受けますし、もともと規模の小さな遠征ばかりですから、あまりお金もかかりません。

— ご家族は？

J.T. 一人です。これまでずっと、そしてこれからもたぶん。少し離れたところに弟が住んでいて、その家族とは親しくつきあっていますし、友達も多いですから、寂しいなんてことはありません。

— 今後の計画は？

J.T. 来年は、まだ確かではありませんが、またK2へ行くつもりです。メンバーは3~4人で、もちろんアルパイン・スタイルです。ルートは南稜か南壁を考えています。やってみたいことはまだまだたくさんあります。ナンガ・パルバットをベースから1日で登ってみたいですね。それから、マカルーの西壁を弟と一緒に登ってみたいという希望もあります。

— どうもありがとうございました。これから頑張ってください。

(インタビュー・構成 吉田憲司)

## 事務局から

### 会員名簿作成のお知らせ

新しい会員名簿を作成します。氏名、住所(郵便番号)、電話番号、勤務先(電話番号)に変更のあった方は、5月31日までに事務局へ連絡して下さい。

### 会費納入のお願い

本会の年会費は前納制となっております。昭和61年度分の年会費を速かに納入下さいますようお願い致します。

尚、6月30日までに納入されない場合は、「ヒマラヤ」に「前金切れ」の表示をして督促しますが、それでも納入されない場合は、会費が納入されるまでヒマラヤの発送を停止します。

年会費 6,000円

※終身会費制度もあります。詳細は事務局迄。

## — 第24回海外登山技術研究会報告 —

恒例の日本山岳協会主催「海外登山技術研究会」が、2月22日（土）、23日（日）の両日、東京・八王子の大学セミナーハウスで開催された。24回目を数えた今年の研究会のテーマは、昨年に引き続き「ヒマラヤ冬期8,000m峰登山」で、全国から講師を含めて約80人が参加した。

1日目は、15時より、「8,000m峰の冬期登山」をテーマにパネルディスカッションにはいった。司会は山森欣一・海外常任委員。パネラーは八木原罔明（84年アンナプルナ南壁断念）、宮崎勉（82年・83年エベレスト断念、84年アンナプルナ南壁断念）、杉本忠男（83年アンナプルナ北面断念）、馬場博行（85年マカルー断念）、山田昇（82年マナスル断念、83年エベレスト登頂、84年アンナプルナ南壁断念、85年マナスル登頂）、斉藤安平（83年チョモランマ断念、85年マナスル登頂）、大蔵喜福（83年、85年チョモランマ断念）の各氏がつとめた。

まず、これまでの日本の冬期登山隊の概要が山森氏から説明され、続いて各パネラーからそれぞれの遠征について報告があった。各パネラーとも、冬期8,000m峰登山を最も困難にするものは強風であるとし、いかに風の弱まる周期をつかむかが成功の鍵であると主張した。八木原、宮崎両氏からは「アンナプルナ、マナスル、ダウラギリなど、ネパール中央部の8,000m峰では、冬でもかなりの降雪があるので、雪に対する準備も必要である」と報告があった。

同じ山の南面と北面の差については、アンナプルナとエベレストの例から「天候的な差はない」、「風の吹く方向など、地形の差による影響が大きい」、「日照時間が短いぶん北面が不利」などの意見が出された。

ついで、日本隊のほとんどが12月中旬までに登頂する計画であったことに対して、「厳しい1月、2月から逃げている」、「11月中にルートのをぼすのはアン・フェアだ」という批判があり、「ネパールや中国政府が定める期間が冬期なのか」、「厳冬

期と積雪期にわけて論ずるべきだ」等の提案があって、最後に、山森氏が「隊の数が多くなれば定義が厳しくなり、より困難を求めるといふ登山の原点に帰るならば、12月から1月、2月にかけて登らざるを得なくなるだろう」と結んだ。

2日目は9時から始まり、午前中は中村純二・海外常任委員の司会で研究報告がなされた。

### ①「冬期8,000m峰登山のためのトレーニング」

筑波大学体育科学学生理研・浅野勝巳氏が、「冬期8,000m峰で予想される低温低圧状態では特に風の影響を受け易く、トレーニングは体力とともに耐寒性を養うことが重要である」と述べ、さらに、寒冷暴露に対する生体反応について、サル、ネズミによる動物実験をもとに報告した。

### ②「高所登山における栄養と食糧」

信州大学・本山十三生氏が、主熱源について、「高所では蛋白は必要」、「糖は血液中の酸素を増やすので多く摂るべき、蔗糖、ブドウ糖より果糖の方が吸収にエネルギーを使わない」、「脂肪は高所では不利」など、ミネラルについては「血液中の血色素をつくるのに必要な鉄分はストックできる」など、ビタミンについては「水溶性であるビタミンCは山の中でも摂る必要がある」「油性ビタミン(A、B、D、Eなど)は吸収が悪いがあらかじめストックしておける」などと説明。また、「高所では食べ物の好みが変わり、総計的にみると、日本食や果物に人気があり、脂肪を含むものや乾いた食べ物に対して食欲がおちる」と報告した。

### ③「ヒマラヤ冬期8,000mの気象」

北海道大学山岳部・山の会・越前谷幸平氏が、82年冬のダウラギリI峰登山に参加した経験をもとに、スライドをまじえて報告し、また、主な8,000m峰における風の流れ・速度などを予想して、登攀ルートの考察をした。

午後は、昨年秋の千葉大学ブータン・ナムシラ峰登山隊長・吉永英明氏が「ブータン登山事情」、芳野起夫・海外委員長が「中国登山事情」を説明して、14時30分に閉会した。（文責：吉田憲司）

## — 第7回高所順応研究会報告 —

3月9日(日)には、東京都山岳連盟主催の「第7回高所順応研究会」が、東京・目黒の「さつき会館」で開かれた。これまでヒマラヤ登山を旨とする登山隊を対象として開催されていた同研究会であるが、今年は広く一般のトレkkerなどにも参加を呼びかけて、関東地区はもちろん、遠く大分や新潟、静岡などから、講師を含めて65名が集まった。

9時30分から始まった研究会は、齊藤一男・都岳連会長の挨拶のあと、以下のとおり進行した。

### — 午前の部 —

9:40 ~ 10:30 「高所順応の基礎及び高所障害事故の分析」

都岳連海外委員会担当理事・飛田和夫氏が講演。過去に発生した日本人のヒマラヤでの死亡事故を分析すると、その半数は雪崩によるものであるが、あとの半数は転・滑落によるものを含めて高所障害が直接的間接的原因であると指摘し、十分な高所順応が遭難事故防止につながると同時に登山成功の確率を高めると語った。具体的な障害事故防止策としては、初めての高度では泊らない、各キャンプでの滞在は極力少なくし休養はすべてベースキャンプでとる、順応しようとする強い意志を持つことなどがあげられた。しかし、最も重要なのはキャラバン中あるいは登山初期の4千メートル台の高所順応を完全にしておくことで、また、高所に至る以前の、相手国の事情、風土、気候などに順応することも重要であると述べた。

10:30 ~ 12:15 「高所障害の実例」

まず、昨年 of HAJ・ブータン・ガンケールプンスム登山隊で肺水腫に罹った隊員の行動と罹患後の症状、その対応と救助活動について、HAJ事務局長の山森欣一氏から詳しい報告があった。氏は、「この例では、罹患者は過去に高所経験があり、今回の登山中もずっと最前線で活躍していたこと、罹患後にも食欲が落ちなかったことなどから、ふつうなら見落されがちなケースであったが、幸い経験者がそばにいたため、正しい判断の

もとに救助活動が行なわれて助かった」と解説し、登山者一人一人が高所障害についての正しい知識を持っていることが必要であると語った。

つぎに、昨年 of HAJ K2登山隊で、8千メートルまで登った後、原因不明の頭痛に襲われ、歩行困難になってヘリコプターで搬出された熊田雅史隊員による体験報告と反省があり、これについて同隊付の塩田純一ドクターによる解説と所見が述べられた。また同時に、同隊の登山活動中肺水腫に罹った隊員の例も報告された。

最後に、高山病のメカニズムについて、塩田ドクターよりスライドをまじえたわかりやすい説明があった。

### — 午後の部 —

13:10 ~ 14:30 「私の高所登山」

日本山岳協会海外委員会委員で山学同志会会員の大宮求氏が講演。ネパール、パキスタン、インド、中国での多くのヒマラヤ登山の経験をもとに、高所障害の例、実際の順応活動、トレーニングなどについて、雑談をまじえておもしろく語った。

14:30 ~ 15:30 パネルディスカッション

飛田和夫、熊田雅史、塩田純一、大宮求の各氏をパネラーとして、山森欣一氏の司会で進められた。内容は主に午前の部で話されたことのまとめであったが、一般参加者からの質問が相次ぎ、活発に意見が交わされた。

15:30 都岳連海外委員会委員長・鈴木雄一氏の挨拶により散会となったが、その後、講師や参加者がそれぞれ席を離れて、雑談形式で情報交換を行なった。

全体として、講師が各分野の専門家ではなく、登山者側の体験談が中心となったが、参加者の多くがこれから高所登山・トレッキングを旨とする初心者であったため、かえって親しみやすく、わかりやすかったと好評であった。

(文責 吉田憲司)



## 地域ニュース

### 《中国》

#### 青藏高原の雪害、5月まで続く見通し

青海省気象局長期予報台長の話によると、青海省南部の牧草地帯に降った雪はすでに凍結して氷層を形成しており、青藏高原の気候的特徴から見て、4月以前に融解することは有り得ないと考えられている。

大まかな統計によると、これまでに約866万7,000ヘクタールの草原が氷雪におおわれ、大災害地では101万9,000頭の牛や羊が寒さと飢えのため死亡した。

今回の雪害は昨年10月下旬に始ったもので、青藏高原のタン格拉山、玉樹、果洛など16県・市の47郷が豪雪に襲われ、25万平方キロの地域が雪におおわれた。

被害の大きかったのは12県・市37郷で、73,000人余りの人と390万頭余りの家畜が被災した。

黄河源頭の曲麻茨などでは、大雪のあとも連続して中規模や小規模の降雪があり、気温は一気に摂氏零下37度にまで下がった。沱沱河などでは、最低気温が零下42度にまで下がり、被害がさらに大きくなった。

これまでの観測の結果、青海高原南部の牧草地帯では、春に入ってからなお2度ほどかなりの降雪がある模様で、雪害は5月の融雪期まで続き、牧草の発芽する頃ようやく解消するものと見られる。従って、今回の雪害の持続時間は延々7ヶ月にも及ぶことになる。

また、ガブロン青海省副省長・災害対策部総指揮者は3月4日、「省南部の牧草地帯では、今回の大雪害で凍傷にかかった7,000人余りと雪盲症にかかった8,000人余りの牧畜民がすべて救出され、死者は2人だけだった。」と発表、さらに次のように述べた。

これまでに25万平方キロの雪原の中に孤立した6,395世帯、34,533人の牧畜民が救出された。もはや雪害のために生命や生活を脅かされている者

はいない。

救済を要する牧畜民の食糧、燃料、生活必需品は、すでに5月末までの分が手配されている。

今回の災害救助で、青海省と現地駐屯軍の衛生部門は、68の医療隊、255人の医師・看護師を派遣し、負傷者の治療や病気予防にあたらせ、災害後の伝染病の発生と流行を効果的に防いだ。

人民解放軍も今回の災害救助活動で大活躍し、前後5,100人余りの兵士が救援に参加し、延べ120機余りの飛行機を繰り出し、空から560トンの食糧、燃料などの緊急用品を投下した。

#### 青海省の豪雪被災地、3年間禁猟

青海省人民政府は、先頃、この冬に重大な豪雪災害に見舞われた地区で3月1日から3年間禁猟にするとの通達を出した。

青藏高原東北部に位置する同省は、野生動物資源が非常に豊富で、国家1類、2類保護動物に属する珍鳥、珍獣だけでも、ヤク、オグロツル、チルー、ユキヒョウ、野生ラクダなど30種近くが生息している。このほか、毎年1,000万羽近い渡り鳥がここで羽を休める。

毎年10月、崑崙山脈とタン格拉山脈の20万平方キロ余りの地域は大雪の被害を受けた。この一帯は珍鳥、珍獣が集中している地域で、数多くのチルー、アジアノロバ、ヤクが寒さと飢えで死んだ。第1報では、少くとも10万頭の野生動物が大雪のため死んだと云う。

中国政府は大雪発生後、野生動物救出のため、10万円を支出した。そして、大雪に見舞われた玉樹、果洛チベット族自治州の治多(ジドゥ)、雜多(ザドゥ)、曲麻茨(チュマルレブ)、瑪多(マドゥ)の各県と海西チベット族自治州のゴルムド市のタングラ山地で、野生動物の回復と繁殖を助けるため、3年間全面禁猟にすることを決定した。

通達によると、猟銃、弾の供給はすべて公安部門の審査・認可を受けなければならず、野生動物の狩猟・捕獲と生息・繁殖を妨げることはすべて禁止される。違反者は司法機関によって法に基づいて処罰される。(以上 中国通信 3月7日)

## CMA 主席に史占春氏が就任

3月16日の中華全国体育総会常務委員会の決議により、中国登山協会（CMA）主席に、1960年中国隊のチョモランマ登山隊長を務めた史占春氏が、副主席から昇格した。（読売新聞 3月25日）

## 《ネパール》

### 冬期カンチェンジュンガ

Andrzej Machnik 隊長（33）の率いる19名から成るポーランド隊（アメリカ人2名、西ドイツ、イギリス各1名を含む）は、12月9日にヤルン氷河上にBCを建設。其の後、順次キャンプをのぼし、グレート・シェルフ上にC4（7,750 m）を建設。12月26日から30日にかけて大雪に見舞われて停滞を余儀なくされる。

1月11日午前6時、Jerzy Kukuczka（37）と Krzysztof Wielicki（35）の2人はC4からアタックを開始。無酸素で8時間の登高の末、冬期初登頂に成功した。彼らは強風と寒気に苦しめられたものの雪と氷の状態は良好で、苛酷な冬期に於ける頂上岩壁帯の難易度はUIAAグレーディングのⅢ-Ⅳ級であったとの事。

登頂後、午後5時30分にC4に帰着。翌日、BCへ下山する。

第2アタック隊のAndrzej Czok（38）はC4で高山病にかかり、パートナーのPrzemyslaw PiaseckiがC3へと降したが、1月11日の晩にC3（7,250 m）で死亡。

Andrzej Czok 隊員は、1948年生れで、ポーランドでも屈指のクライマーであった。タトラ、アルプス、コーカサス、パミールでの素晴らしい登攀の後、特筆すべきヒマラヤでの足跡を残した。1979年、ローツェ無酸素登頂。1980年南稜新ルートからエベレスト登頂。1982年、西壁新ルートから単独でマカルー登頂。1985年、冬期ダウラギリI峰初登頂。などの記録がある。

### プレ期の日本隊は3隊

ネパール観光省は、2月24日に今春のプレ・モ

ンスーン期にネパール・ヒマラヤに挑む登山隊を発表した。発表によると今春の登山隊は16ヶ国から33隊で、そのうち日本隊は3隊のみ。

日本隊は以下の通り。

- サガルマータ（8,848 m）  
高山研究所隊（遠藤晴行隊長）は、東南稜から無酸素登山を目指す。
- ローツェ（8,516 m）  
ベルニナ山岳会隊（福島正明隊長）は、西面からの無酸素登山を目指す。
- ランタン・リルン（7,246 m）  
大谷ヒマラヤ山岳会隊（沼賢亮隊長）は、南東稜からの登頂を目指す。

## 《パキスタン》

### 登山規則一部改正

パキスタン外務省は、2月20日、パキスタンを訪れる登山隊に適用するレギュレーションの一部改正を通告した。以下のとおりである。

- i) 登山隊は、救助活動のための保証金として4,000 USドルを預けるか、あるいはその国の在パキスタン公館かパキスタンの旅行取扱業者の保証書を提出すること。これを怠る隊のパキスタン国内での登山は認めない。
- ii) 登山隊は、1日当たり150ルピーをリエゾン・オフィサーに支給する。
- iii) 1つの登山隊は1年に1山の8,000 m峰しか登山を許されない。ただし、文化・体育・観光省の長官の特別許可を受けた隊はこの限りではない。
- iv) 1人の登山者が1シーズン中に複数の隊のメンバーとなることはできない。
- v) 各登山隊のリーダーとメンバーは入山から下山まで同一行動をとること。リーダーは遠征期間中決して隊を離れてはならない。
- vi) 1987年1月より、記録映画の撮影に対しても保証金デポジットが適用される。

以上、改正点だけを簡状書にした原文を全訳したが、これだけでは不明な点が多く、すでにこの

文書を手にした関係団体からの問い合わせも相次いでいるので、在日パキスタン大使館の担当官の説明をもとに若干の解説を加えたい。

まず第1項は、これまで正式登山許可とともにパキスタン観光省から各登山隊へ送られる「注意事項」に、緊急時のヘリコプター出動に対して保証金として4,000 USドルをあらかじめ預けるか、あるいは在パキスタンの各国大使館の保証を受けた費用負担誓約書を提出すること、と明記されていた。今回の改正では、ヘリコプター出動の有無にかかわらず、事故を起こした隊のためにパキスタン政府機関が何らかの救助活動を行なった場合、その全経費を登山隊が負担することを保証させ、支払い能力のない隊の入山を認めないとしている。これまでの例からみると、ヘリコプターが出動した場合でも、隊がパキスタン滞在中に経費の清算を済ませるのは無理で、ふつう6ヶ月ほど経ってから請求書が送られてくる。ところが最近、隊員構成が2ヶ国以上という隊など、母体組織のしっかりしていない登山隊が増えて、いざ経費を請求しようとしたときには隊が解散していたというケースもあり、また保証書の発行を拒否する大使館が増えていることなどから、パキスタン政府としては4,000 USドルの保証金デポジットを徹底させたいようである。日本隊の場合、正規の許可を受けた隊であれば、ふつう日本大使館の保証は得られるので、特に問題はないと思われるが、あとで予想外の請求書が送りつけられることのないよう、救助依頼は慎重かつ正確に行ないたい。

第2項は、これまで60ルピーであったものが値上がりした。

第3項は、これまでは、パキスタン国内の5つの8,000 m峰（K2、ガッシャーブルムI峰、II峰、ブロード・ピーク、ナンガ・バルバット）のうち、1つの登山隊が1シーズンに登れるのは2山までとされていたが、1山に減らされた。複数の8,000 m峰に登るためには、文化省か体育省、観光省のいずれかの長官の特別許可を必要とする。特別許可の取得には条件があるわけではなく、困難はないとしているが、煩雑な渉外が予想される。なお、8,000 m峰と7,000 m峰、複数の7,000 m

峰の継続登山は可能である。

第4項は、1人の登山者がいくつもの隊を渡り歩くことを禁止するもので、これによって昨年1シーズンにK2、ガッシャーブルムI峰、II峰に登った（ブロード・ピークは失敗）フランス人、エリック・エスコフィエのような真似はできないことになった。

第5項は、これまでも登山隊がわかれて行動することはできないとされていたが、実際には多くの隊が、いくつもの小パーティに分散して登山活動を行ったり、あるいはもともと複数の小登山隊が1つの登山隊として許可を受けて入山し、現場では各隊に分かれてそれぞれの登山を展開するというケースがみられたため、国防上の警戒という目的もあり、新たな通告がなされた。

第6項も、これまでも、映画撮影に限らず、すべての写真撮影に対して、登山隊が帰国後フィルムとプリントのコピーを1セットパキスタン政府に送付することになっていた。しかし、多くの場合守られていないので、今回の改正では、とりあえず8ミリ映画やビデオ撮影についてのみコピーを提出することを義務づけ、実行されない場合は救助のための保証金として預けた4,000 USドルのデポジットを返却しない、という罰則が設けられることになった。写真撮影については、すでにかなり厳しい制限が加えられ、隊付きのリエゾン・オフィサーがこれを監視することになっているが、大抵の場合はほとんど監視されない。

上記6項目は、すべて、1987年1月以降にパキスタン国内で登山を行なう隊に適用される。

（この項 文責：吉田憲司）

## インフォメーション

### 東京集会のお知らせ

4月の東京集会は下記の通りです。皆さんお誘い合わせの上、お出かけ下さい。

日 時 4月21日(月) 19時～

場 所 HAJ ルーム

## 印・パ関係の改善

最近、インド政府高官3人が相続いでパキスタンを訪れ、両国の政治、経済と軍事問題について会談を行った。これはここ1年来、インドとパキスタン関係の緩和の継続的發展であり、世論はこれを歓迎している。

1月8日から10日にかけて、シン、インド蔵相はパキスタンを訪問した。今回の会談で、双方は経済貿易関係を拡大することに同意し、両国間の工業部門の貿易額を倍増し、現在、政府間に限られている貿易ルートを民間企業にも拡大することを決定した。両国の財政担当相は、双方の代表が近いうちに会談を行うこと、両国の経済貿易関係を拡大する具体的な方針を検討し定めること、措置をとって、双方の輸出加工区で合弁企業を開設するよう両国の商工界に働きかけることを決定した。双方はまた両国間の航空、海運、通信を進展させることも決定した。

1月10日から12日にかけて、パトナガル・インド国防省秘書はパキスタンを訪問した。双方は争点となっているシアチェン氷河問題について「誠意をもった率直な」会談を行った。シアチェン氷河はカラコルム山脈の東部にあり、延長約70km、幅2kmの長い峡谷地帯である。それは高地寒冷地帯にあり、住民もいないため、両国間の国境線を決めておらず、両国はこの地域に対して支配権を行使していなかった。然し、ここ数年来、両国の部隊がこの地域で戦火を支える対峙の情勢があらわれた。

今回の会談で、両国の国防省秘書は、両国の緊張関係を緩和する第一歩の措置として、また両国の関係を一層正常化させ、善隣関係の発展によい条件をつくるため、平和的な対話の方式でこの紛争を解決することで見解の一致を見た。インド国防省秘書の招きで、パキスタン国防秘書は今年の3月末あるいは4月初めにインドを訪問し、この問題に対して続けて討論を行うことになった。

1月20日、イスラマバードで行ったインド外務省秘書バンダリ氏とパキスタン外務省秘書ナイク氏の会議は積極的な成果を収めた。双方は、主権

と領土保全の相互尊重、相互不可侵、相互内政不干渉、平等互惠、平和共存と云う平和共存五原則にもとづいて、両国の善隣友好と協力関係をうち建てることを強張した。両国の外務省秘書はまた条約締結問題を重点として討論した。1981年、パキスタンはインドに対しての「不戦条約」の締結を提案した。インドはパキスタンとの「友好条約」の締結を提案した。双方はこれまでの討論で大部分の条項が合意に達したが、双方の見解の合わない問題をどのように解決するか。また、「外国へ軍事基地を提供しない」と条件の中に入れるかどうかについてずっと意見が合わなかった。今回の両国外務省秘書の会談は争点を詳しく討論し、これを解決する新しい提案をうちだした。双方はそれぞれの提案の基礎の上に1日も早く全面的条約を締結することに合意し、そして、これらの提案を両国政府に提出して、審議の後、両国外相によって、より深く討論を行うことを決定した。また、両外務省秘書は相互信頼を促進するために一連の措置と提案をうちだした。

インドとパキスタンの政府閣僚が行った一連の会談は、両国首脳が昨年末、ニューデリーで合意した協議にもとづいて行ったものである。このトップ会談では、双方は相手の核施設を攻撃しないと云う「口頭での合意」を見たばかりでなく、今年上半期の両国関係の正常化のために具体的な手配を行った。すでに終了した3つの会談のほか、印パ合同委員会の4つの小委員会が2月上旬に会議を再開すること、両国外相および合同委員会の第三ラウンドの会談を3月から4月までの間にイスラマバードで行うことを決めた。この一連の会談による成果は、ラジブ・ガンジー・インド首相の今年上半期のパキスタン訪問への地ならしとなる。ラジブ・ガンジー首相の訪問が成功すれば、両国関係の正常化の新しい推進力となるだろう。

イスラマバードの観測筋は、インドとパキスタンの間に食い違いが存在してもその関係は引き続き緩和の方向へ発展すると見ている。

(北京週報 1986. 2. 11)

《報 告》

# 中国登山研究会

主催 日本ヒマラヤ協会

## 中国登山研究会

### ▲研究会会場（東京）

H A J では、今夏、中国の四川省登山協会と合同で、岷山山脈の最高峰である雪宝頂（シェオバオディン、5,588 m）へ登山隊を派遣する。

此の度、この合同登山隊の議定書調印のために中国登山協会、四川省登山協会から成る代表団を日本へ招請した。

H A J では、これ迄国際交流事業と指導・啓蒙事業の一環として、ヒマラヤ諸国の研究会を、各々の国で登山担当の要職にある方をお迎えして数多く実施して来た。ヒマラヤへ行こうとする登山者に日本で相手国政府の登山・トレッキング部門を担当する責任者から直接話を聞いて貰おう、と云うのがこれら研究会の趣旨であるため、参加者はH A J 会員に限定せず、誰でも参加出来るように一般公開としている。

今回も中国代表団の来日をとらえて中国登山研究会を開催した。代表団の滞在日程の都合により東京でしか開催出来なかったが、当日は、中国登山に関心がある方が多数参加され好評を博した。

#### 中国登山協会代表団メンバー

団 長	鄭榮発 (55)	四川省登山協会副主席
団 員	汪鉄銘 (42)	中国登山協会常務委員
”	馮有榮 (40)	四川省登山協会秘書長
通 訊	李 慶 (26)	四川省登山協会

### 中国登山研究会

日 時 3月2日（日）13:00～16:15

会 場 大正セントラル会議室

参加者 36名

研究会は先ず、主催者側を代表して遠藤副会長より代表団の先生方へ歓迎の挨拶がなされ、続いて鄭榮発団長より来日の挨拶がなされて研究会日程に入った。

#### 「中国の登山活動」

汪鉄銘氏より標題に関して、1) 中国登山の歴史。2) 中国登山の現状。3) 中国登山の展望。4) 中国登山協会の最近のニュース。の4つに分けて話された。

「中国登山の歴史」では、1956年のムスターグ・アタ、コングール・チュービュの最初の登山隊から中国登山協会の設立。チョモランマ、シシャパンマなどの8,000 m 峰登山、合同隊などの紹介があった。

1985年の中国登山隊は以下の通りである。  
納木那尼（ナムナニ、7,151 m）中日合同隊（史占春隊長）  
卓奥友（チョー・オユー、8,201 m）西藏隊（成天亮隊長）

木孜塔格（ウルグ・ムスターグ、6,973 m）中米

## 合同隊（克林奇隊長）

慕士山（ムスダーグ、6,900 m）中日合同隊（森美枝子隊長）

中国登山の現状・展望・最新情報については、別項を参照されたい。

### 「雪宝頂及びその姉妹峰について」

鄭榮発氏より四川省の山の紹介がなされ、中でも今夏初めて外国人に開放されることになった雪宝頂付近の紹介がスライドをまじえて詳しく話された。（別項参照）

### 「中国登山の現状」

H A J の山森事務局長より登山許可の取得、隊荷輸送、経費支払いなどの涉外全般から開放ピーク等についての説明がなされた。以下に要点を記す。

#### 1. 登山許可の手続き

登山隊が直接、中国登山協会に申請書を提出する。ネパール、パキスタンのように日本山岳協会の推薦状を添付して外交ルートで提出する必要はない。

（提出先） 中国登山協会 宛

（住 所） 中華人民共和国北京市体育館路九号

#### 2. 議定書締結

議定書の調印は文書のやりとりでも可能であり、北京まで出向かなくても良い。

#### 3. 経費支払い

中国国内の費用の算出は、「費用徴収規定」に細かく規定されている。中国側に支払う費用は、隊員が入国するまでに納入する。（北京の中国銀行本店銀行事業部のCMA口座に送金。）

#### 4. 中国々内の手配

中国々内の全ての手配（隊荷輸送、交通機関、接待所、現地雇員の手配など）は、基本的には中国側が行う。

中国側の連絡官・通訳・コックには、規則に従って手当と装備を支給しなければならない。装備の支給については、金銭で解決することも出来る。

#### 5. トランシーバー

登山隊のトランシーバーの持ち込みは、許可制であるので、事前に申請しなければならない。VHFバンドのトランシーバーも使用出来る。

#### 6. 隊荷輸送

中国の場合、山域にもよるが国内輸送距離が非常に長くなるため、登山隊の隊荷は、隊員が入国する数ヶ月前迄到北京（上海）に送らねばならない。

尚、チベットの場、ネパール側から隊荷を持ち込むことも可能である。

#### 7. 登山時期

従来、中国の登山時期については、春、夏、秋の3シーズンと思われてたが、山域によっては夏のシーズンにも許可が貰える。

春 3月～5月 夏 6月～8月

秋 9月～10月 冬 11月～1月

#### 8. トレッキング

中国々内の山地旅遊（トレッキング）に関しては、1986年1月に設立された中国国際体育旅遊公司（王富州総経理）の扱いとなる。例えば、昨年オープンされた西寧からラサ経由でカトマンズへ抜けるような自動車による旅遊などは、この公司扱いとなる。但し、登山隊に付随するトレッキング隊に関しては従来通り中国登山協会の取扱いとなる。

中国国際体育旅遊公司

中華人民共和国北京市体育館路十号

### 新たな解禁峰

中国の高峰がオープンされて、今年で8年目を迎える。1979年のオープン時に開放された高峰は9峰とその姉妹峰のみであったが、其の後、中国登山協会（CMA）では順次、解禁峰を増やし、現在では約40峰近い高峰が開放されている。その山塊もカラコルム山脈、天山山脈、崑崙山脈、ガンディセ山脈、ヒマラヤ山脈、唐古拉山脈、念青唐古拉山脈、祁連山脈、積石山脈、巴顏喀拉山脈、横断山脈、大雪山脈など中国の高峻山岳を有する殆どが開放されるに到った。

これら順次開放された山々のいきさつを見ると、中国の新たな山の開放と云うのは、まず、登山隊から未解禁峰への登山申請があって、それを受けてからその山を調査し、その山の位置する担当省や自治区と協議の上、開放するか否かを決めているようである。

次に各地区のオープン状況を述べる。

#### 1. チベット地区

西藏登山協会では、1985年ナムナニ峰、ニンチン・カンサを開放して登山隊を迎えたが、此の程同協会では、さらに1986年から1990年までに開放する16峰について西藏人民政府に申請し承認を得たと発表した。

これら16峰のリストを見ると1986年から1987年にかけて、マカルー、チョー・オユー、ローツェの8,000 m 峰がオープンされることになり、これで中国内に有する8,000 m 峰9座が全て開放されることになった。また、これらの姉妹峰としては、チョー・オユーの姉妹峰としてギャチュン・カン、チョー・ウィ、チョラプサンが開放される。チョー・ウィは、未だネパールではオープンされておらず、ネパールの未踏峰としても人気の高い山の一つである。

この他、1986年から1987年にかけては、クーラ・カンリ、カルジャン、ニエンチェンタングラ、ギャラペリ、ラプチカンなど7,000 m 台の未踏峰が6座もオープンされる。

#### 2. 新疆ウイグル地区

昨年、新疆登山教会では崑崙山系のウルグ・ムスターグ、ムスターグの2峰と天山山系のトムール峰をオープンして話題をまいた。オープンと同時にウルグ・ムスターグとムンターグにはそれぞれアメリカ、日本の2つの合同隊が入り、ウルグ・ムスターグは登られた。

今年は、トムール峰に日本の女性隊（田部井淳子隊長）が挑む。

#### 3. 青海省地区

1985年は、黄河、長江と云う中国の二大河川の源流付近の山々がオープンされ、グラタンドン、ヤラダツォ、バヤンカラ、カカサイジモンカなどに登山隊が入った。これらのオープンに伴い1986年春からは、さらに青海省の最高峰であるブカダワン峰（布略達坂峰、6,860 m）と地元の牧畜民から「神山」と呼ばれるニェインポ・ユゼ峰（年保・什沢峰、5,369 m）の2峰がオープンされる。

#### 4. 四川省地区

1986年から岷山山脈の最高峰である雪宝頂（シ

ェオバオディン、5,588 m）とその姉妹峰がオープンされる。

#### 5. 甘肅省地区

1985年、祁連山脈の最高峰、祁連山（キレン、5,547 m）が開放され日本の登山隊が入った。

#### 6. 陝西省地区

秦嶺山脈の主峰で、陝西省の最高峰である太白山（3,767 m）が、1986年春からオープンされ日中合同隊が登ることになった。

### 新たな開放旅遊地域

#### 1. チベット地区

ナムナニ峰のオープンに伴い、聖地カイラス山・マナサロワール湖の旅遊が出来るようになり、ルートとしての新蔵公路、チャンタン高原も開放された。

ネパールとの相互旅遊に関しては、ザンムー（樟木）とフラン（普蘭、インド名タクラコット）の2箇所の国境が開放されており、1985年からラサ〜ザンムー〜カトマンズ間の自動車旅遊が開始された。フランの方は、ネパール側の道路事情もあって今のところ自動車旅遊は出来ない。（フランからラサ迄の自動車旅遊は可能。）

#### 2. 新疆ウイグル地区

1986年5月からクンジュラ湖畔が開放され、パキスタンとの相互旅遊が可能になる。中国側のチェック・ポストは、タシュクルカンの先のペラリに開設される。

#### 3. 青海省地区

青藏高原を横断する青蔵公路の西寧〜ラサ間の全長2,000 kmが1986年春から正式にオープンされる。また、この青蔵公路の正式オープンに伴い、ツァイダム盆地、チャルハン塩湖の観光が出来るようになった。

黄河源流域のオーリン湖、ザーリン湖の旅遊も1985年から開放された。

#### 4. 四川省地区

岷山山脈の雪宝頂のオープンに伴い、景勝地として名高い九寨溝、黄龍寺溪谷のオープンも近々なされるもようである。

（文責：尾形好雄）

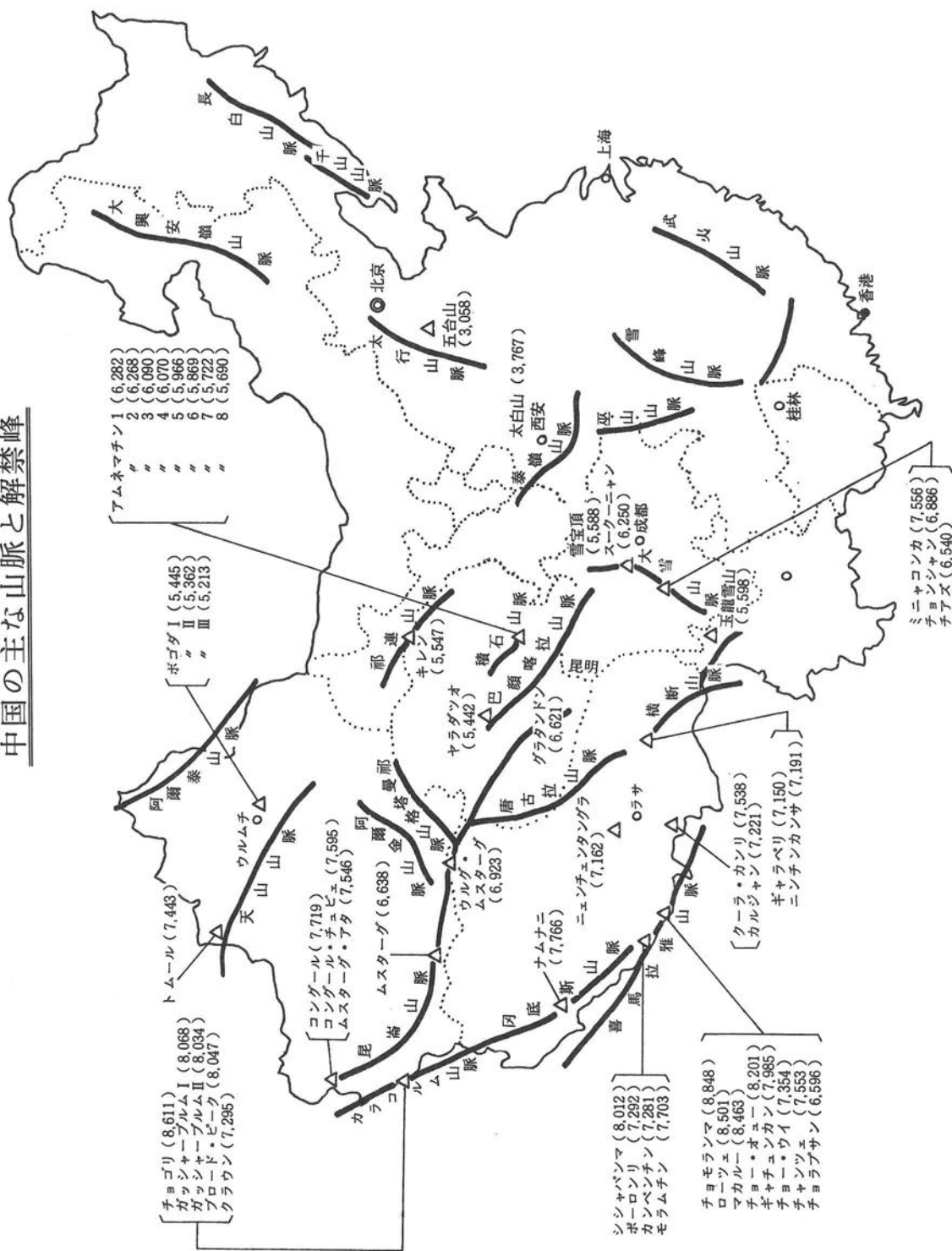
# 中国の開放されている主な高峰

( \*印は未踏峰 )

<b>(1) 8,000m峰</b>			
1. チョモランマ (Qomolangma)	8,848 m	チベット	
2. チョゴリ (Qogir)	8,611 m	新疆	
3. ローツェ (Lhotse)	8,501 m	チベット	1987年オープン
4. マカルー (Makalu)	8,463 m	"	1986年オープン
5. チョー・オユー (Cyo Oyu)	8,201 m	"	1986年オープン
6. ガッシャーブルム I (Gasherbrum I)	8,068 m	新疆	
7. ブロード・ピーク (Broad Peak)	8,047 m	"	
8. ガッシャーブルム II (Gasherbrum II)	8,035 m	"	
9. シシャバンマ (Xixabngm)	8,012 m	チベット	
<b>(2) 7,000m峰</b>			
10. ギャチュンカン (Gyachung Kang)	7,985 m	チベット	1987年オープン
11. コングール (Kongur)	7,719 m	新疆	
12. モラムチン (Molamenqing)	7,703 m	チベット	
13. ナムナニ (Namunani)	7,694 m	"	1985年オープン
14. コングール・チュビエ (Kongur Tiubie)	7,595 m	新疆	
15. ミニャ・コンカ (Minya Konka)	7,556 m	四川	
16. クーラ・カンリ (Kula Kangri)	7,554 m	チベット	1986年オープン *
17. チャンツェ (Zhangzi)	7,553 m	"	
18. ムスターグアタ (Muztagata)	7,546 m	新疆	
19. チョー・ウィ (Cho Aui)	7,354 m	チベット	1986年オープン *
20. シパンドゥ (Sipande)	7,330 m	新疆	*
21. トムール (Tomor)	7,435 m	"	1985年オープン
22. クラウン (Crown)	7,295 m	"	*
23. ポーロン・リ (Porong Ri)	7,292 m	チベット	
24. カン・ベン・チン (Gan Ben Chen)	7,281 m	"	
25. カルジャン (Karjiang)	7,221 m	"	1986年オープン *
26. ニンチン・カンサ (Ningchin Kangsha)	7,191 m	"	1985年オープン *
27. ニェチェンタングラ (Nyainqentanglha)	7,162 m	"	1986年オープン *
28. ギャラ・ペリ (Gyala Peri)	7,151 m	"	1986年オープン *
<b>(3) 6,000m峰、5,000m峰</b>			
29. ウルグ・ムスターグ (Muztag Shan)	6,978 m	新疆	1985年オープン
30. グラタンドン (Geladaindong)	6,621 m	青海	1985年オープン
31. ムスターグ (Muztag)	6,638 m	新疆	1985年オープン *
32. チョラプサン (Chonab Fen)	6,596 m	チベット	1986年オープン *
33. スークーニャン (Siguniang)	6,250 m	四川	
34. アムネマチン (Anemaqin)	6,282 m	青海	
35. ユイロン (Yulong)	5,596 m	雲南	1984年オープン *
36. キレン (Qilian)	5,547 m	甘肅	1985年オープン
37. ボコダ (Bogda)	5,445 m	新疆	



## 中国の主な山脈と解禁峰



# 中国への外国登山隊及びツアーリスト隊に対する

## 費用徴収規定

(1983年発効一部改定)

訳出 鈴木雄一

1. 中国を訪れる登山隊及びツアーリスト隊は、許可取得後、期限内に登山あるいはツアー登録料を支払うこと。支払いなき場合、その申請は自動的に取り消される。
2. 登山隊及びツアーリスト隊は、議定書調印後、経費予算書を提出し、中国登山協会(CMA)の審査及び承認を受けること。
3. 登山隊及びツアーリスト隊は、中国入国以前に経費予算書による費用全額を北京の中国銀行本店銀行事業部のCMA口座へ送金することとし、当該隊の中国での活動終了時にCMAが決済を行なう。また、隊はCMAに対して銀行為替のコピー1部を参照符として送付すること。
4. 登山隊及びツアーリスト隊に借金が生じた場合は、規定の期限内に1ヶ月あたり1%の利息を添えて返済すること。
5. 登山隊及びツアーリスト隊が、議定書に定めた活動のキャンセルを規定の期限内に申し出た場合においても、支払われた登録料は返還されない。また、規定の期限を過ぎてのキャンセルには、経費予算書による費用の1/2相当以上の罰金を課す。然しながら当該隊が、同地域で活動するCMAが容認する他隊を推薦すれば罰金は適用されない。
6. 登山隊またはツアーリスト隊が、規定の期限内に中国での費用の総額を支払わない場合、旅行査証の手配あるいは入山権授与を拒絶する。

### 7. 登山料(1隊あたり、単位:元)

チョモランマ峰	4,000	7,000 m 以上の峰	2,400
チョゴリ(K2)峰	4,000	6,000 m 以上の峰	1,600
8,000 m 以上の峰	3,200		

上記レートは、隊員数20人以内の隊に適用され、隊員数が20人を超える場合は、超過人数1人あたり80元を別に徴収する。

6,000 m 以下の峰の登録料は、隊員1人あたり80元とする。また新たに解禁された未踏峰に初めて登攀する場合には、特別登録料を徴収する。

### 8. 報酬金(1日1人あたり、単位:元)

	(登山)	(ツアーリング)
リエゾン・オフィサー	32	26
通訳	32	26
高所協力員	29	—
キャンプ要員	26	23
低所ポーター	16	16
ヤク、馬、ラクダ方	16	16

9. 中国人要員の隊への合流及び帰宅に要する旅費（1人あたり、単位：元）

高所協力員	40
キャンプ要員	40
低所ポーター	20
ヤク、馬、ラクダ方	20

上記、中国人要員の到着日時については、議定書に規定した期日内に発表する。

10. 食事・宿泊及び市内でのサービス請負い費（1日1人あたり、単位：元）

	(単独行者)	(2～10人の隊)	(11人以上の隊)	
北 京	150	100	85	市内でのサービス請負い費を含む。
上海、広州、成都、西寧、ウルムチ、カシュガル、桂林、西安、天津、蘭州、杭州、福州、昆明、南京、無錫、も同じ。				
ラ サ	280	240	210	市内でのサービス請負い費を含まず。
シガツェ	150	120	100	市内でのサービス請負い費を含まず。
協 格 爾	90	60	50	市内でのサービス請負い費を含まず。

雅安、康定、瀘定、日隆、四川省の広漢空港、大武、共和、温泉、天池も同じ。

(a) 高級ホテルや特別室に宿泊する場合は、追加料金を徴収する。

(b) 食事、宿泊及び市内でのサービス請負い費を既に支払っている場合には、航空券の予約、旅行査証の手配及び宿舎と空港間の輸送（20kg以内の手荷物の輸送を含む。）サービス料の追加徴収は免除する。

(c) 外国登山隊またはツアーリスト隊の中国出入国が、北京、上海あるいは広州である場合、空港と宿舎間は隊としての行動が出来ないため、それぞれの隊員は下記レートの運賃を支払うこと。

単独行者	30元
2人～8人の隊	20元
8人以上の隊	10元

(d) 重量を超えた手荷物及び貨物の輸送（車の雇用、運送、3日以内の保管を含む。）については、輸送量の10%を別にサービス料として徴収する。

(e) 郊外への観光ツアーにおける車の雇用料は、その土地の基準料金とする。

(f) チベット政府の許可を得て、ラサ付近でキャンプ生活をする者については許可発行、衛生設備、拝観切符、旅行査証の手配及びチベット出国のための航空券の予約等の費用として1日1人あたり50元を徴収する。

(g) CMAの供給するもの以外の車、洗濯、医療、郵便及び通信、酒類等の費用は、すべて自費でまかなうこと。

(h) 物品の保管料は、最初の1ヶ月までは1日1kgあたり1分とし、それ以後は、その半額とする。

(i) 北京での食事、宿泊、交通費を自費でまかなう者については、会議、通訳及び旅行査証の手配の費用として1日1人あたり20元を徴収する。

11. 山での食事（1日1人あたり、単位：元）

キャンプ要員	17
標高5,000 m以下で行動する、ヤク、馬、ラクダ方及びポーター	5
標高5,000 m以上で行動する、ヤク、馬、ラクダ方及びポーター	17

中国人要員の食料（炊事具、燃料を含む）は、上記レートに従ってCMAが提供する。炊事テント、ガソリン・ストーブ、B・Cで使用する圧力釜の提供及び食料、炊事具、燃料の輸送費は、登山隊またはツーリスト隊の負担とする。

## 12. 輸送費

(車 型)	(チベット)(元/km)	(新疆・青海・四川)(元/km)	(駐車料)
ファーストクラス・ジープ(5人用)	2.50	2.20	64
セカンドクラス・ジープ(7人用)	2.40	1.92	64
サードクラス・ジープ(4人用)	2.20	1.76	64
ファーストクラス・ミニバス	5.50	4.40	180
セカンドクラス・ミニバス	4.40	3.20	120
トラック	4.80	3.36	160
ファーストクラス・コーチ	7.00	5.60	200
セカンドクラス・コーチ	6.40	5.12	200

(青海～チベット線を走るトラックは、1 kmあたり 3.36元とする。トラックの積載能力は、青海～チベット線及びチベットでは 2.5～3 トン、他地域では 3～3.5 トンであり、容積は11立方メートルである。)

空車の帰路費用については、上記レートの半額を徴収する。B・Cで使用する車輛の運賃は、走行距離に応じて徴収し、駐車料金は徴収しない。然しその際、隊は運転手に対する手当、食費、保険料を負担し、必要な作業衣を支給または貸与すること。

## 13. 荷役動物の雇用料金

ヤク、馬は1日1頭あたり26元、ラクダは40元である。ヤクと馬が標高5,000 m以上で活動する場合は1日1頭あたり30元とし、ラクダについては標高による料金の変更はない。雇用された動物が到着後、待機する場合は1日1頭あたり上記レートの半額を徴収する。また動物の行き、帰りの旅費として、それぞれ1日分ずつの料金を徴収する。動物が死亡した時には、その地方の規則に従って補償すること。

## 14. 死亡・傷害及び医療保険

登山隊及びツーリスト隊は、リエゾン・オフィサー及び他の中国人協力員に対して中国人民保険公社の死亡・傷害及び医療保険を付保すること。死亡・傷害保険契約額は、リエゾン・オフィサー及び協力員が1人あたり15,000元である。医療保険額は、すべての人員につき1人あたり5,000元とする。

### — 保 険 料 —

	保険期間	死亡・傷害保険料率	医療保険料率
標高6,000 m以上	3ヶ月	2%	1%
標高6,000 m以下	3ヶ月	1%	1%
ポーター及びヤク、馬、ラクダ方	3ヶ月	1%	1%
ツアーリング	2ヶ月	0.6%	1%

何らかの理由により、無保険で、中国人リエゾン・オフィサーや協力員が登山あるいは、ツアー中に死亡、負傷、不具あるいは病気になった場合、それぞれの保険金額に応じた補償金を支払わねばならない。

CMAは登山隊あるいはツーリスト隊のために、これらの保険の手続きを請負う。

また、隊はすべての隊員に対し、死亡・傷害保険を付保すること。その保険は、トレッキング、自動車旅行及び馬、ラクダ、ヤク等によるすべての事故に適用されるものであること。

15. 中国への隊が軽装で旅行出来るよう、CMAは中国人要員に対し、下記の費用（1回のエクスペディション、1人あたり）で登山装備及び用具（キャンプ及び専門用具は除く）を供給する用意がある。

リエゾン・オフィサー及び他の中国人要員	500元
5,000 m以下で行動するポーター及びヤク、馬、ラクダ方	200元

登山期間が3日以下の場合、上記費用は半額に減額される。隊は、上記の適用を受ける場合でも、中国人高所協力員に対し防寒着及び専門装備を無料で支給すること。

リエゾン・オフィサー及び中国人要員へ支給する登山装備及び用具を隊が自ら中国へ持ち込む方法を選択した場合、それらの装備及び用具は無料で支給され、その取扱いはCMA制定の規則に従いCMAが行うものとする。

16. 隊がチョモランマ及びシシャパンマのB・Cで使用するテントの借用を希望する場合は、チベットのCMA地方事務所へ規定の料金を支払うこと。
17. 登山隊及びツアーリスト隊が中国へ持ち込む物品の装備については、特別管理物品（撮影機、カメラ、腕時計、通信機器、登山装備、衣類等）は、登録後に免税で通関を許可されるが、消耗品（燃料、食料、医薬品等）については、中国税関管理局が総価格の10%を輸入税として徴収する。
18. CMAが手配する郵便、電信、食料、燃料、登山装備の費用は、双方の協議により決定する。
19. 登山隊及びツアーリスト隊と隊に派遣された中国人リエゾン・オフィサー及び他の要員が、中国内で航空機あるいは列車を利用する際の費用は、関係部門の規定により徴収する。
20. 登山隊が山地や旅行中及び登山中に映画やビデオを撮影する場合は、CMAに対し撮影料を支払うこと。また、撮影したフィルムあるいはビデオテープを第三国で販売または放映する場合は、CMAに対し販売価格あるいは放映料総額の10%を支払うこと。

(撮影料、単位：元)

チョモランマ峰	25,000	チャンズ(章子)峰	15,000	ミニヤコンカ峰	15,000
チョゴリ峰	25,000	コングールチュピエ峰	15,000	ムスターグアタ峰	15,000
シシャパンマ峰	20,000	シシャパンマ西峰	10,000	カンベンチン峰	10,000
ガッシャーブルムI峰	20,000	アムネマチン峰	10,000	ボゴダ峰	7,000
ガッシャーブルムII峰	20,000	チアズ(嘉子)	7,000	チョンシャン(中山)峰	7,000
ブロードピーク	20,000	スークーニャン峰	7,000	ボゴダの姉妹峰	5,000
コングール峰	17,000	スークーニャンの姉妹峰	5,000	アネマチンの姉妹峰	5,000
モラムチン峰	17,000				

トレッカーが山岳地域で映画及びビデオの撮影を希望する場合は、撮影機1台につき(8ミリを含む)前述の料金の10%を支払うこと。

指定された年にアムネマチンに10人以上、スークーニャン及びボゴダに45人以上のトレッカーを派遣する外国旅行代理店に対しては、特惠措置が与えられる。

21. 外国登山隊及びツアーリスト隊の中国での諸活動の手配は、CMAが請負うものである。よってCMAは、隊の中国内総支出の5%を総合サービス料として徴収する。
22. この規定で言う「元」とは、中国の貨幣単位である。
23. 以上の規定は、1983年より発効する。
24. 本規定の解釈及び改訂権は、CMAに属する。

中国登山協会

# 雪宝頂及びその姉妹峰について

四川省登山協会

副主席 鄭榮発

雪宝頂は、またの名を雪欄山といい、中国四川省の阿坝蔵族(アバ・チベット族)自治州の松潘県の境内にあり、海拔5,588mのこの山は、岷山山脈の最高峰である。

同峰は松潘県の県城から東へ約25km離れた所に位置している。(東経103°51′、北緯32°41′)山容は雄大で、岩壁も切り立っている。一年中雪でおおわれ、氷河には懸垂氷河がかかり、雪崩も多く、これ迄人類に征服されていない未踏峰である。

この山に隣接している姉妹峰は、小雪宝頂(5,540m)、四根香峰(5,359m)、東日志来峰(5,119m)、玉籃峰(5,080m)、門洞峰(5,058m)、東日琪菊峰(5,026m)及びその他の4,500m以上の山が10余りある。それらの山々はいずれも四方が切り立ち、頂きが尖っており、氷河の浸蝕によってなりたった山である。

雪宝頂はまるで、天を突くような刃で、群峰の中で一番高く青天に突き刺している。時には、幻のような景色となり、朦朧した雲烟の中に籠る中に、かすかに現われたり、消えたりして、その景色は非常に美しいものです。

四根香峰は、さながら青天に突き刺す四つの真黒い剣のようで、その偉大壮麗な姿は人々の心を打つ。

小雪宝頂は、逆に静かに伏した亀の背中のような山である。

要するに、この山群は変化に富み、それぞれ特長を持っていて、登山やトレッキングに適した素晴らしい場所である。

雪宝頂及びその姉妹峰は、高さから言えばあまり人々に注目されないかも知れないが、氷河の浸蝕によってリッジはみなナイフ・リッジとなり、傾斜がきつくて登攀には難しい。その上、辺りの景観が美しく、地形も複雑なので登山愛好者には大きな魅力を有する。

現地に住んでるチベット族の人々は、雪宝頂の

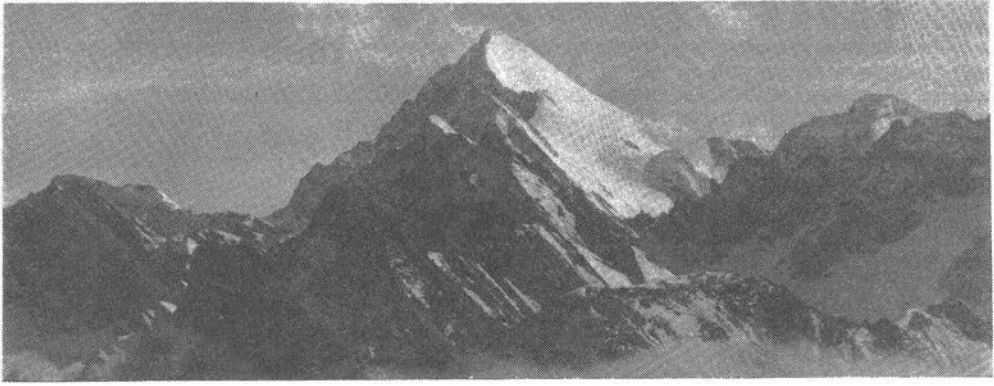
ことを吉祥と幸福のシンボルと見なし、人類に幸せをもたらす「福山」と呼んでおり、毎年旧暦の6月16日(1986年は7月22日)には、必ず巡礼に行く。

雪宝頂の山域には高所の湖が沢山あり、比較的大きい海子が108個ある。雪宝頂の直ぐまわりにも園海(東面)、方海(南西面)、半園海(北西面)、三角海(北東面)などがあり、これらの湖の面積はそれほど広くなく、長さは2kmにも及ばず、幅も100m位しかない。湖は殆ど氷蝕ともレーンから成る氷河湖である。

雪宝頂山域の気候は、寒冷と半ば乾燥と云う特徴になり、四季の変化はそれほど目立たない。冬は長く、春は秋に連なって、殆ど夏はない。一年中の平均温度は摂氏5℃(谷間では、1月10~0℃で、7月10~22℃です)で、乾期と雨期は著しい区別がある。年間降雨量は500~600mmで、春は100~200mm、冬は10~25mmである。一番多く降るのは5月、6月、9月で400mmに達する。5月~9月は雨期となり、10月から翌年の4月までは、雪の降るのを主として乾燥期となる。

中日両国の登山界の交流を強め両国人民の友情を促進させるために、中国登山協会、四川省登山協会と貴国の日本ヒマラヤ協会の合同の努力により、雪宝頂の対外開放は許可された。今年の7月、中日両国の登山家達が合同で、この美しい未踏峰に初登攀することになった。私達は貴国の登山家の皆様、中国の四川省にある雪宝頂、ミニヤ・コンガ、四姑娘山などに登山とトレッキングにいらっしゃることを心から歓迎致します。その際に私達は必ず皆様に行き届いたサービスをして真心のこもった受け入れをしてご満足させるようにお約束します。

次に入山ルートと登攀ルートを次の通りご紹介いたします。



◀ 雪宝頂 (5588米)

### <入山ルート>

1. 成都から自動車で灌県、汶川、茂汶を経て松潘に着く。距離は343km、2日間かかります。
2. 松潘から雪宝頂の南西側にあるBC(4,170m)までは3つのルートが選定できます。

①松潘—小泥土岭—霍唐—上納来—麻病村—扎糞寺—BC.

全行程は約40kmあり、2日間かかる。1日目は約25km走り、2日目は約15kmを走り、5時間が必要とする。これは山の中の小道で、馬は通れるが車は通れない。険しい地形がなく、沿道の景色が良いので、訪れる人を喜ばせるでしょう。

②松潘から自動車で岷江、納来を経て、麻病村に着く。距離は60km。松潘から岷江までは33kmで舗装道路である。岷江から麻病村までは山もあれば川もあり、山村の舗装道路である。小型自動車は通れる。麻病村からBCまでは3時間で行ける。(馬を雇用するのは難しい)

③松潘から黄龍溝の出入り口まで(自動車では、玉翠山を越えて、巡礼の小道に沿って雪宝頂の南西側のBCに着く。松潘から黄龍溝の出入り口までは59kmあり、黄龍溝の出入り口からBCまでは25kmある。毎年旧暦の6月16日に行なわれる黄龍寺の縁日の日に使われる巡礼の小道である。この道を歩くのは難しく、危険性も伴ない、畜生は通れない。然しながら途中の景色は美しく、湖も点在し、野生動物も出入りする。

### <登攀ルート>

雪宝頂の北西と南西の2つの方向から状況を判断すれば、一番良い登攀ルートは雪宝頂の南西側にある。BCのキャンプ予定地も南西側にある。

そこは、主要氷河の谷の東側にあり、高度4,170mで1万平方メートル位の平らな地帯である。水源は泉で、風も少ない。そこから登攀ルートと登攀状況は直接観察することができる。

南西側から雪宝頂に登るルートは3つある。

#### 1. 南稜ルート

4,170mのBCを出発して、川谷に沿って主要氷河のフィルン盆地まで行き、そこから主峰からの南東稜に突き上げる南稜に沿って、頂上稜線まで登り、さらに頂上稜線を頂上へと登る。このルートの下には氷河と岩石の混合地帯があって、斜面はきつくなき、難しさもたいしたことはない。岩石地帯から4,800~5,000mの所をまいて登り、西へトラバースして、アイス・フォール地帯をまいて頂上稜線に出る。頂上稜線から先は傾斜30°位の氷雪の斜面である。

#### 2. 西稜ルート

BCを出て、主要氷川のフィルン盆地の西側に進んで西稜まで行く。そこから西稜に沿って頂上へ向う。フィルン盆地の4,300~4,400mから4,800mまでは、岩登りを主とする。西稜に出てから、その先は、約30°位の氷雪の斜面を頂上に向う。

#### 3. 南西稜ルート

フィルン盆地から南西稜に沿って登る。主に氷河に沿ってまっすぐ登り上げる。4,600mの下にアイス・フォール地帯が点在しており、雪崩とアイス・フォールの崩壊の危険性がある。4,600mから上は全て雪の斜面で傾斜は約40°以上である。

以上のことがご参考になれば幸甚です。

(訳：四川省登山協会通訳 季 慶)

# 1986年パキスタン登山隊一覧

山名	高度	国(隊)名	隊長名	隊員数	期間
<スカルド地区>					
1. K <sub>2</sub> (南東稜)	8,611	イタリア	Renato Casarotto	6	4/15~120日
2. " (北西稜)	"	イギリス	John Barry	6	5/1 ~120日
3. " (南 稜)	"	西ドイツ	Dr.Karl M. Herrligkoffer	25	5/1 ~120日
4. " (南東稜)	"	フランス	Maurice Barrard	5	5/2 ~120日
5. " (南西稜)	"	イタリア	Agostion DA Polenza	16	5/15~120日
6. " (南 稜)	"	アメリカ	John Smolich	10	5/15~120日
7. " (南東稜)	"	オーストリア	Alfred Imitzer	8	6/1 ~120日
8. " (南東稜)	"	韓 国	Sang-Yel Park	15	6/15~120日
9. ブロード・ピーク	8,047	アメリカ	Claude Fiddler	12	5/1 ~90日
10. "	"	西ドイツ	Dr.Karl M. Herrligkoffer	25	(K <sub>2</sub> と継続)
11. "	"	フランス	Maurice Barrad	5	( " )
12. "	"	イタリア	Agostino DA Polenza	16	( " )
13. "	"	スペイン	Sebastien Alvora Lamba	7	5/15~90日
14. "	"	西ドイツ	Franz Piffi	12	6/1 ~90日
15. "	"	韓 国	Sang-Yel Park	15	(K <sub>2</sub> と継続)
16. "	"	ユーゴスラビア	Viki Grosalg	10	6/15~90日
17. "	"	オーストリア	Major P. A. Callinan	8	6/30~90日
18. "	"	西ドイツ	Hupfauer Siegfried	15	7/15~90日
19. ガッシャー・ブルム I 峰	8,068	ス イ ス	Paul Trchanz	5	5/7 ~90日
20. "	"	登歩溪流会隊	清水 修	4	6/1 ~90日
21. "	"	フランス	Gerard Pistillo	6	6/10~90日
22. "	"	イタリア	Pietro Mario Carrara	10	6/15~90日
23. "	"	フランス	Cokkinos Alain	7	6/30~90日
24. ガッシャー・ブルム II 峰	8,035	フランス	Bernard Muller	12	4/25~90日
25. "	"	イタリア	Pietro Mario Carrara	10	(GIと継続)
26. "	"	ユーゴスラビア	Viki Grosalj	10	(Broadと継続)
27. "	"	スペイン	Belen Eguzkiza	4	6/24~90日
28. "	"	西ドイツ	Siegers Dieter	15	7/10~90日
29. "	"	西ドイツ	Bernd Ritschel	8	7/20~90日
30. ガッシャー・ブルム IV 峰	7,925	アメリカ	Steve Swenson	10	4/1 ~90日
31. "	"	イギリス	David Roy Loampard	7	5/7 ~90日
32. "	"	スペイン	Carlos Rabago Juan Aracil	5	5/25~90日
33. ネームレス・タワー	6,257	アメリカ	Steve Swenson	10	(GIVと継続)
34. トラゴン・タワー	6,251	日・ポ合同	Wojciech Kurtyka	4	5/15~90日
35. "	6,257	イタリア	Pinter Arnaldo	11	5/30~90日
36. ネームレス・タワー	6,257	スペイン	Jose Luis Garcia Gallego	7	5/25~90日
37. ラトック II 峰	7,021	ノルウェイ	Fred Husoy	8	6/10~90日
38. チョゴリザ	7,654	スペイン	Sebastien Alvora Lamba	7	(Broadと継続)
39. "	"	イギリス	Andrew R. Fanshawa	5	7/1 ~90日
40. チリン東峰	7,090	横浜山岳会隊	重谷 務	12	5/15~90日
41. ブラルド・ブラック	6,200	フランス	Nizon Claude	22	7/1 ~90日
42. ウリ・ピアフォ峰	6,083	ポーランド	Janusz Skorek	5	7/12~90日



山名	高度	国(隊)名	隊長名	隊員数	期間
<ギルギット地区>					
43. ウルタル・サールⅡ峰	7,388	神渡湖衆隊	成田俊夫	12	5/15~90日
44. ディラン	7,257	関西学院大学隊	日上耕司	7	5/25~90日
45. ユクシン・ガルダン・サール	7,530	スペイン	Arranz Alejandro	6	5/29~90日
46. バツーラⅠ峰	7,785	ポーランド	Jerzy Tillak	10	6/ ~90日
47. ハラモシュ	7,397	ポーランド	Jacek Bruzdowicz	11	6/16~90日
48. ルブガル・サール東峰	7,200	秋田クライマーズC	小田島秀夫	11	6/25~90日
49. 無名峰	6,931	イタリア	Luigi Barbuscia	15	6/27~90日
50. ディステギル・サール	7,885	フランス	Jean Mare Chaussard	11	7/1 ~90日
51. サンゲマル・マール	7,050	ベルギー	Jacques Collaer	10	7/1 ~90日
52. ラカボン	7,788	サンナビキ同人隊	和田誠志	8	(ナンガと継続)
<ディアミール地区>					
53. ナンガパルバット北東稜	8,125	スペイン	Miguel Gomez Snachez	6	6/25~60日
54. " 西面	"	ベルギー	Vanhees Jan	4	7/1 ~60日
55. " 西面	"	イタリア	Gunnella Marco	24	7/10~60日
56. " 西面	"	ポーランド	Kazimierz Malczyk	8	7/25~60日
57. " 南面	"	サンナビキ同人隊	和田誠志	8	5/上~
<チトラル地区>					
58. ティリチ・ミール	7,706	西ドイツ	Siegfried Ludwing	4	6/30~60日
59. " 東峰	7,691	イタリア	Franco Ribetti	6	7/1 ~60日

# Silk Road

パキスタン

- 各種グループツアー  
トレッキング  
(少人数より個人手配)
- ヒマラヤ遠征業務一式
- パキスタン国内でのご  
要望のすべて



カラコルム・ヒンズークシュの旅

写真：'80年ラトックⅣ峰遠征隊 大宮 求氏 提供

(日本語でお問い合わせ下さい)

## (株)シルクロード・ツアー・サービス

House No.35-B, School Road F-7-1, Islamabad.  
Telephone: 822693

Govt. Licence No 253  
代表取締役 督永 忠子

## ■ 寸 感 ■

中国代表団の帰国を追うようにして、中国を訪れた。行く先々で日本での返礼とばかりに熱烈歓迎され、少々胃の具合がおかしくなった。

三国志の都・成都から空路、チベットへ向った。青々とした四川平野から僅か2時間のフライトで荒涼としたチベット高原の一角に降り立つことが出来る。その昔、禁断の地と云われたチベットも随分と便利になったものである。上海の乗り継ぎさえうまくいけば、ラサからその日のうちに日本へ帰ることも可能であろう。チベット潜行に苦労された先蹤者達はこの現実を如何に思いや。

## 事 務 局 日 誌 (3月)

- 1日(土) 第1回雪宝頂隊打合わせ会
- 2日(日) 中国登山研究会(前出)
- 3日(月) 中国代表団さよならパーティ
- 4日(火) 中国代表団離日(成田見送り、山森、吉田)
- 5日(水) J.トロワレ氏来局

- 6日(木) CMAの協議に稲田、尾形訪中
- 7日(金) 山森事務局長の御尊父(義)様葬儀
- 13日(木) 稲田、尾形帰国
- 14日(金) ヒマラヤNo.173発送
- 17日(月) キンナール、ギャラペリ隊打合せ
- 24日(月) キンナール隊のビザ申請
- 27日(木) ブータン外相歓迎晩餐会(帝国ホテル、尾形)
- 31日(月) 東京集会(11名)

## ヒマラヤNo. 174 (5月号)

昭和61年4月10日印刷 61年5月1日発行

発行人 柴田 金之助  
 編集人 尾形 好雄  
 発行所 日本ヒマラヤ協会  
 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1  
 淀橋食糧ビル506号

# ヒマラヤへのステップ

## エクスペディション & トレッキング

ネパール、インド、パキスタン、  
 ソ連(中央アジア)へ遠征、  
 トレッキングを計画の皆様へ。

航空券から登山要請、現地手配、入国査証(ビザ)代介手続き、遠征隊・トレッキング用山岳保険加入に至るまで適切なトータルアドバイス、手配を受けたまわります。

ヒマラヤ以外にもヨーロッパアルプス、アフリカ、北・南・米etcの格安航空券、情報もあります。

世界山岳旅行クラブ  
 運輸大臣登録旅行業代理店業第2809号  
 住友海上火災登山トレッキング保険代理店

## (株)マウンテン・トリップ

〒150 東京都渋谷区恵比寿西1-8-1 かずさやビル3F 303号 ☎03-476-1200 担当 藤原  
 主催:株ロータリーエアサービス 〒105 東京都港区新橋2-2-4 ☎03-504-0111 担当・佐藤(一般登録第332号/取扱主任者・伊藤園子)



## TREASURE TOUR



### EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 —

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、  
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがご答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-574-8880

三井航空サービス代理店2452号



カラコルムの秀峰 ウルタル山

## 遙かなる高み

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。  
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

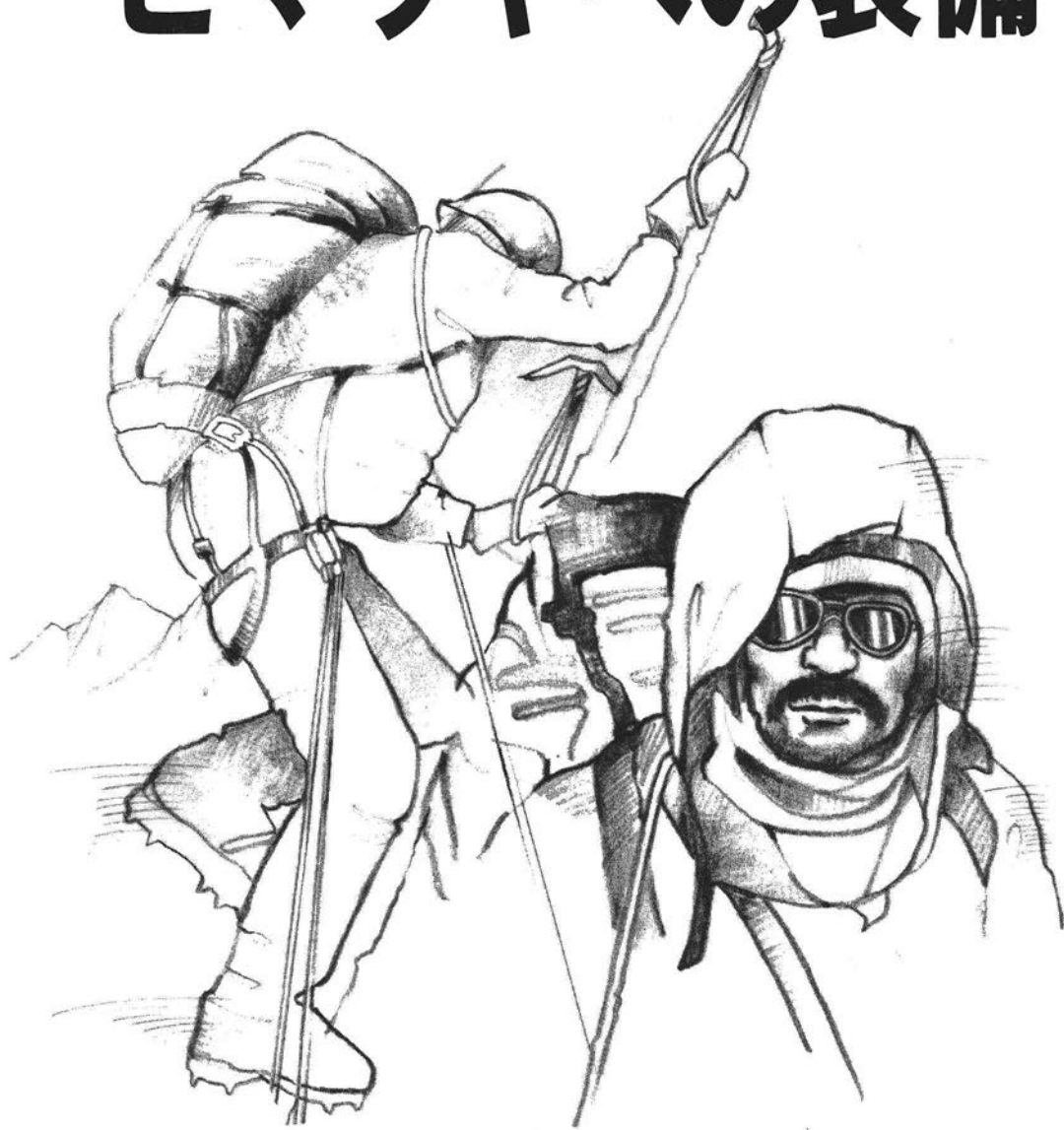
トレッキング・海外登山  
シルクロード・秘境旅行  
のパイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5階 ☎03(237)1391(代表)  
大阪営業所 〒541 大阪市東区平野町4-53-3 ニューライフ平野町202号室 ☎06(202)1391(代表)  
カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING (P) Ltd. P. O. BOX 3017  
KATHMANDU, NEPAL ☎216338  
運輸大臣登録一般旅行業607号

# ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



## ICI 石井スポーツ

- 登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2丁目2番3号 ☎03(208)6601~3
- 新潟店 / 〒950新潟県新潟市東大通2丁目5番1号 ☎0252(43)6330
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2丁目123番地 ☎0486(41)5707
- 仙台店 / 〒980宮城県仙台市東八番丁107番地の36号 ☎0222(97)2442
- 水道橋登山店 / 〒101東京都千代田区三崎町2丁目8番14号 ☎03(264)5575~6
- 町田ジョルナ店 / 〒194東京都町田市原町田6丁目6番地14号 ☎0427(26)6248(代)
- 神田登山店 / 〒101東京都千代田区神田神保町1丁目8番地 ☎03(295)0622
- フーズショップ / 〒160東京都新宿区百人町2丁目2番43号 ☎03(232)1286
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区新宿1丁目16番7号 ☎03(346)0301(代)
- 外商部 / 〒160東京都新宿区大久保2丁目19番10号 ☎03(200)7219
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町6番地 ☎0273(27)2397(代)
- 事務所 / 〒160東京都新宿区百人町1丁目4番15号 ☎03(200)1004
- 札幌登山店 / 〒060北海道札幌市中央区南二条西4丁目4番 ☎011(222)5305